

森林管理署長が語る！

中越森林管理署長 中西 雄一郎

1 はじめに（管内概要）

- 中越森林管理署は新潟県の中越地方の10市4町2村にまたがる区域を管轄しています。このうち国有林が所在するのは、7市2町で、その面積は約10万haであり、中越地方の森林の約31%を占めています。国有林は主に中越地方の東部から南部にかけての、福島、群馬、長野の各県に接する地域に分布しています。管内の森林は人工林が約6%、天然林が約94%となっています。

なお、民有林の人工林率は25%で、国有林ほどではないですが、全国平均と比べると低くなっています。

- 地形は急峻で、福島県境の越後山脈、群馬県境の三国山脈等により形成され、八海山や巻機山、苗場山といった、多くの登山客が訪れる山々があります。

豊かな自然環境を背景に「上信越高原国立公園」や「尾瀬国立公園」、「越後三山只見国定公園」などの自然公園に指定されており、信越トレイル、スノーカントリートレイルといったロングトレイルが設定され利用されています。また、国の名勝及び天然記念物に指定された日本三大溪谷の一つでもある清津峡など、自然環境に関する観光面でも人気の高いエリアとなっています。



尾瀬



清津峡

- 管内を信濃川が縦断し、中津川、清津川、三国川、魚野川などの支流が合流し越後平野を潤しています。国有林はこれら河川の源流部に位置しており、この地域の特産でもある、おいしいお米「魚沼産コシヒカリ」や日本酒（ドジャースの公式日本酒になった「八海山」）などの醸造に欠かせない良質な水を育む水源地として重要な役割を果たしています。

- ・ 国有林内には、イヌワシも生息しておりますが、年々減ってきているようです。

新潟県イヌワシ保全研究会によると、新潟県の生息ペア数は 35 組程度と推定されており、全国最多レベルです。

しかし 1990 年頃に生息していた 50 ペアに比べると著しく減少しています。

また、全国的に繁殖の成功率が下がり続けており、個体群維持に必要な 40% を大きく下回る 17.4% (2022) となっています。

新潟県では、2000 年代前半に 20% 程度まで大きく低下したのち、保全活動等により現在では 40% 程度まで回復しているようです。

近年は、ドローン撮影を目的とした入林が多くありますが、入林者には飛行自粛区域を明示してイヌワシに影響を与えないようにするための協力を求めています。



イヌワシ

写真:イヌワシ保存研究会

- ・ 気候は日本海側気候に属し、日本海からの季節風が山間部に多量の降雪をもたらす我が国有数の豪雪地帯です。豊富な積雪を活用した全国有数のスキー場エリアであり、JR 上越新幹線や関越自動車道など、首都圏からのアクセスが良好なことから、多くのスキー客が訪れ、地域の観光産業に寄与しています。

2 国有林の利活用について

- ・ 自然環境や観光立地に恵まれている当署管内の国有林の特性を活かし「国民の森林」としての管理経営を行っていくうえで、公益的機能を高度に発揮させるための森林整備を行うとともに、観光資源などに積極的に活用することにも重点的に取り組んでいます。

教育・文化・保健休養など多様な利用のため、自然休養林や自然観察教育林、野外スポーツ地域などの「レクリエーションの森」を 15 箇所設定し、スキー場施設や山小屋、湿原の遊歩道や展望台といった多くの人がスポーツや自然探勝等で自然とのふれあう場を提供し、地域の振興に寄与しています。



八海山,中ノ岳



苗場スキー場

- 夏場の利用では、苗場スキー場において、日本最大規模の野外音楽イベント「フジロック」が開催されています。4日間で延べ12万人もの人が訪れるイベントですが、平成23年に自然と音楽の共生を目指し、フジロック主催者と新潟県及び湯沢町との間で協定が結ばれ「フジロックの森」プロジェクトが始まりました。プロジェクトの活動の一つに、森を親しむエリアの整備があり、会場周辺の森林整備や自然散策を楽しむ木道の整備等が実施されており、国有林を活用していただいています。



フジロック



フジロックの森

- また、自然とのふれあいの場として、「ふれあいの森」や「遊々の森」を設定し、森林における様々な体験活動や学習活動を行う場として国有林を活用いただいています。魚沼市大白川の浅草岳を望む「浅草山麓遊々の森」では、県立エコミュージアムの周辺国有林約230haをエリアとして、バリアフリーの遊歩道・観察道等が整備され、小中学生の体験学習など、自然の中で遊び、自然環境について学ぶ場として利用されています。

3 森林施業について

- 当署管内の国有林の人工林の占める割合は約6%と低く、令和6年度実績は活用型の間伐で2644m³の木材生産を行っています。スギ、カラマツを中心に主伐期に達した森林も多く、湯沢町との森林整備推進協定に基づき、民有林と連携した木材生産や森林整備に取り組む枠組みを作っており、毎年、木材の安定供給のためのシステム販売を民有林と連携が可能かどうか、お互いの事業箇所を確認しながら実施しています。

しかし、搬出条件の良いところはすでに伐ってしまっており、台帳上は生産可能な林分になっていても、あまりに小面積だったり、搬出可能な道がないなどの問題があり、連携した木材生産等は実施ができていません。

- 一方天然林については、大半が広葉樹林で、ブナ、ミズナラ、コナラが中心の二次林が多く、伐採はされず木材として利用されていませんが、苗場山国有林に森林総合研究所によるブナ天然更新試験地が設定されており、過去に大規模な伐採試験が行われています。なお、新潟県内のブナ林は林床にチシマザサが多く生えている所が多く、天然更新が困難な要因となっています。



苗場のブナ林

民有林においても、広葉樹林の割合が高いのは国有林と同様であり、長期的には、広葉樹をもっと活用していく必要があるとの認識はあるようです。先駆的な取り組みとして、紙谷新潟大学名誉教授指導の下で実施されている川上から川下までの各事業者が連携し間伐されたブナ材を有効活用する「スノービーチプロジェクト」があります。

この川上にあたる魚沼市大白川生産森林組合の所有するブナ林は、もともと薪炭林として使用されてきたブナ二次林を天然林改良による切捨て強度間伐を実施したことで素性の良い木の多いブナ林となっており、将来の用材用の保存木を残す上層間伐による優勢木を切り出す利用間伐を繰り返しつつ、さらに小面積の更新伐も実施して更新稚樹の育成を図っており、天然林のような林相で管理するための施業を実施しています。



切り出されたブナは、末口径や曲がり、矢高などに応じて等級区分が行われ、「スノービーチプロジェクト」に参画している事業者にも種多様に活用されています。

穴あきや偽心材などのブナの欠点についても多雪地域のブナの特徴として「生態デザイン」と名付けられ家具や内装材として利用されています。



出典：紙谷(2025)

木材として付加価値の高い需要の開拓や森林生態系に配慮した森林施業など、広葉樹伐採には課題も多いのですが、地域産業（キノコ栽培）の振興への貢献や広葉樹二次林を適度に伐採することによるイヌワシの狩場の創出など、民有林と連携して広葉樹林の利用について検討を進められればと考えています。